



休耕田を再生させた田んぼで田植えをした小川高定時制の生徒たち
—小川町飯田

実体験で環境教育

小川高
定時制
22人が田植え体験

小川

小川町飯田の田んぼで、県立小川高校（高野俊彦校長）の定時制課程の1年生22人が田植えを行った。

同校には、高校では少ない「環境基礎」の科目がある。地球温暖化やオゾン層破壊、森林破壊について学んでおり、田植えも温暖化の授業の一環だ。田んぼは、休耕田を借りて再生させた

約120平方メートル。苗は担当の松本浩一教諭が自宅で育てた。

生徒たちは「虫に刺された。かゆい」「足が抜けない」などと言いつつも田んぼに張ったひもに沿って、苗を一本一本丁寧に植えていた。

秋にかけて草刈り、収穫、脱穀、もみすりなど一連の作業も体験する。

同校は「みどりの再生に取り組み県立学校パワーアップ事

業」推進校に指定されており、昨年度は里山の間伐、和紙の原料となるコウソの栽培、台風で倒れた校内の樹木を有効活用したベンチやテーブル作り、野菜や緑のカーテン作り、校内の花壇の整備なども行っている。

長谷川靖教頭は「本校では実体験を通じ、環境について幅広く学ぶことを目標に、必要な時は可能な範囲で少し早めに登校してもらい、さまざまな体験活動に取り組んでいる」と話していた。

（磯田正重）